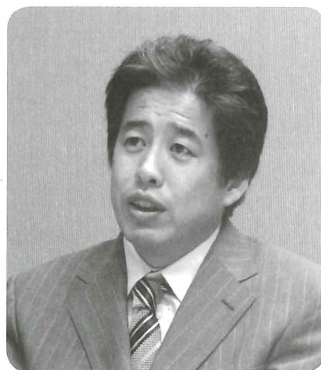


特別講演

「スポーツ名勝負の舞台裏」

スポーツジャーナリスト
株式会社スポーツコミュニケーションズ
代表取締役

二宮 清純 氏



第22回 軽井沢トップセミナー

平成28年8月4日、軽井沢・ホテル音羽ノ森にて第22回「軽井沢トップセミナー」を開催。高野吉太郎会長の挨拶に続き、これまで数多くの名勝負の舞台裏をはじめ、名監督の選手育成やリーダーシップなどを取材してきたスポーツジャーナリストの二宮清純様にお話しいただきました。

2020年への課題

—成熟都市・東京を目指す—

東京オリンピック・パラリンピックが4年後に迫りました。1964年に開催された当時、日本は高度経済成長期の後期で、新幹線や高速道路などのインフラが整備されるなど、まさしく行け行けドンドンの時代だったんです。伸びゆく東京、発展する東京。キーワードは「成長」でした。オリンピックはそのシンボルとしての役割を担っていました。

その頃65歳以上の高齢者は全体のわずか6%。4年後は約30%になっているとのこと。我々はこの高齢化という事実を無視するわけにはいきません。

3年前、JR九州の「ななつ星」が開業しました。美味しいものを食べて、ゆっくり温泉に入って、きれいな景色を眺めて旅を楽しむ。「こんな遅い列車に誰が乗る」と社内では反対の声が多かったそうです。それ

がいまや1年待ちとも2年待ちともいわれ、日本一予約がとれない列車だと聞きました。お客さまの大半は、これから自分たちの人生を楽しもうというシルバー世代の方々です。

オリンピック・パラリンピックは社会と無縁であるわけにはいきません。1964年、もてはやされていた言葉は「効率」でした。いま、時代のパラダイムは、「効率」から「快適」へ、そして「成長」から「成熟」へとシフトしています。そうであるならば、住みやすい東京、暮らしやすい日本を目指してしっかりと準備をし、2020年は「成熟した都市・東京」を世界にアピールすべきだと思います。

オリンピック・パラリンピックを契機に様々なイノベーションが生まれます。さて2020年には何が起きるのか。AI（人工知能）、そして顔認証などのセキュリティ技術も飛躍的に進むことでしょう。僕も今から楽しみにしているところです。

本当の「おもてなし」とは何か

2012年のロンドンでは、オリンピック以上にパラリンピックの評判が非常に高かったです。スーパーマーケットの商品棚が車いす目線に合わせてあるなど、かゆいところに手が届くようなホスピタリティを感じました。

「ボランティア」という言い方をせずに「ゲームズメーカー」という言葉が使われていたのも新鮮でした。皆がゲームに参加し、皆がオリンピック・パラリンピックを支えているというイメージです。

東京の実力を世界に示せるか。あるいは恥をかくか。パラリンピックがリトマス試験紙になると僕は思っています。心のバリアフリーを含めて、パラリンピックへのしつかりした準備が、本当の意味での「おもてなし」につながっていくはずなんです。

僕のパラリンピックに対する考え方が変わったのは、一人のアスリー



トとの出会いがきっかけでした。これまで何個も金メダルをとっている、河合純一という全盲のスイマーです。

彼は15歳で視力を失いました。「二宮さんは私の後輩なんですよ」と言われて、最初は意味がわかりませんでした。「20年後、30年後、もしもしたら病気で失明するかもしれないし、事故でケガをする可能性もある。ご家族のどなたかが車いすの生活になるかもしれません。つまり、私たちが障がい者は健常者の未来の姿なんですよ」と聞き、全くその通りだと思いました。今できることがこれから先もできるという保証はどこにもありません。

ブラインドサッカー日本代表の前キャプテン落合啓士選手は、「今、自分たちがいちばん困っている問題を

皆に知ってほしい」と言っていました。駅のホームに点字ブロックと線字ブロックがありますが、そのすぐ先が線路なんですよ。比較的新しい地下鉄を除いて、銀座線などにはまだホームドアがありません。視覚障がい者の3人に1人がホームでの転落事故を経験しているとのこと。もっと危ないのは歩きスマホです。ぶつかった方もケガをしますが、当てられた身障者はもっとたいへんなことになります。

開催中には、目の不自由な方、足の不自由な方、世界中からいろいろな人たちが東京に集まります。パラスピックへの環境整備は、高齢化社会への対応でもあります。もちろんバリアフリー化などハード面の整備も大事ですが、私たち大人も含めて若者や子どもたちへの「心の教育」が重要だと思います。

名勝負の舞台裏にある「準備力」

2000年のシドニーオリンピック。高橋尚子さんがマラソンで金メダルをとり、女子スポーツ界で初の国民栄誉賞にも輝きました。

Qちゃんがスパートしたのは35キロ地点でした。シドニーのコースは

この辺りがアップダウンもあって一番きついんです。ここでスパートする選手はいないと思っていたので、「えっ！ウソだろ」と驚きました。最後までもつだらうか、大丈夫かな……。もっと驚いたのは、ずっと後ろに張り付いていたリディア・シモン（ルーマニア）ですよ。シモンは後半に強いランナーですが、付いていくことができませんでした。

スパートの瞬間、右手でサングラスをバシッと捨てたのを覚えておられるでしょう。拾ったのは誰だったのか。それはお父さんです。マラソンは42・195キロ。沿道にはたくさんのお客がいます。たまたまそこにお父さんがいたなんてことは非常に可能性が低い。つまり、何がしかの役割を担ってそこに立っていたのではないか。おそらく「今だ、いけ！」というサインを出したのかもしれない。

実は、Qちゃんと小出義雄監督、ご両親、限られたスタッフが35キロ地点で合宿を張っていたそうです。繰り返し、繰り返し、ここでスパートの練習をしていたんですね。試合前、小出監督に連絡をとろうとしてもできなかった理由がわかりました。見れば僕たち記事にします。このチ

ームは徹底して秘密を守りました。本当に勝負に勝ちたければ、大事なことは人に話すな、ということですよ。

2008年、北京オリンピックの男子400メートルリレーで日本が銅メダルをとりました。短距離は黒人選手の独壇場です。この競技で日本人がメダルをとるなんてあり得ないと言われていましたから、ある意味金メダル以上の価値あるメダルです。この奇跡の銅メダルにも恐るべき準備力がありました。

リレーでは、どの位置から走るか、バトンを渡すか、あらかじめ地面にそれぞれテープを貼ることになっています。あいにく予選当日は雨が降っていました。オフィシャルの色はシルバーです。キャプテンの朝原宣治選手は白いテープを事前に用意していました。白ならスタジアムの照明で見えづらくすることはありません。日本よりもタイムがいい6チームが失格するなか、4人のバトンは見事につながりました。

負けた人はよく、「運がなかった」「ツキに見放された」とか言いますが、それは違います。単に準備不足だっただけ。結果を出すか、出さないか。その差は何にあるか。それは「準備力」です。野球でもサッカーでもグラウ

ンドに出た時にはもう勝負は決まっている。仕事も同じだと思えますね。

リーダーとしてあるべき姿—— 闘将・仰木彬監督から学んだこと

日本人メジャーリーガーのイチロー、野茂英雄、吉井理人、木田優夫、田口莊、彼らは仰木彬さんの門下です。なぜ仰木さんの下から有能な人材が次々育ったのでしょうか。

野茂のトルネード投法やイチローの振り子打法、あれは教えてできるものではありません。周りは「止めろ」「止めろ」の大合唱でした。その才能を認め、後押しをしたのが仰木監督だったのです。

イチローは名古屋の愛工大名電高



校からドラフト4位でオリックスに入団しました。プロ入りしてピッチャーからバッターに転向。当時のトレーナーは「彼は体が硬いから大成しない」と言っていたそうです。

「お前は足も肩もいいし、バッティングのセンスもある。ただその変な打ち方だけはやめてくれ」と首脳陣に言われた時、「このフォームは開発中なんです。しばらく時間がかかるので自由にやらせてください」と答えたそうです。生意気な奴と思われるたでしょう。なかなか使ってもらえず、一度は2軍落ちも経験しました。

彼に惚れ込んだのが仰木監督でした。「野球選手は女優と一緒にだ。誰からも親しまれるような名前に変えた方がいい」と、イチローという名前を考えたのも仰木さんです。

「オープン戦でテストしてみるから、あんだ、ちょっと見てくれんか」と監督から電話が入りました。仰木さんから頼まれて嫌とは言えません。初日は5打数4安打、次の日は3安打、はたまた次の日は4打数3安打。すごい選手が出てきたと記事を書きまくりました。でも、別の日にはノーヒットもある。あれっ、おかしいなと思いました。実は僕らが呼ばれ

るのは打ちやすいピッチャーの日だけだったんです。ジャーナリストたちに「すごいバッターが現れた」と書かせて、イチローに自信をもたせようとしていたわけです。

どんなに実力があってもチャンスを与えなければ人は育ちません。どこで勝負させるか。仰木さんは選手の旬を見極めることができる監督でした。石の上にも3年と言いますが、人はそんなに待てません。遅すぎても早すぎてもいけない。人を育てるには、「適材・適所」、そしてもう一つ大切なのは「適時」。この3つが必要だということを仰木さんが教えてくれました。

1996年、オリックスの本拠地・グリーンスタジアム神戸。巨人との日本一をかけた大試合でのことです。4回、巨人が反撃を始めました。セクターに飛んだ打球を本西厚博が地面スレスレでキャッチ。塁審の判定はセーフでした。仰木監督、血相変えてベンチを飛び出します。どこをどう見てもアウトなわけですから、審判も自分のミスだと心の中で認めていたはず。しかし簡単に判定を覆すわけにはいきません。監督の怒りは収まらず、選手たちをいったんベンチに戻しました。

ところが10分後、仰木監督は審判のお尻をバシッと叩き、謝罪してベンチに戻りました。悪いのは相手なのになぜ謝ったのか。実は仰木さん、怒りにまかせて言っただけではないことを口にしていたんです。「おまえら、巨人に裏金もらつとるんか」と……。まさしく、それを言っちゃあ、おしまいよっていう言葉ですよ（笑）。「俺が悪かった。これから公正なジャッジをお願いしますよ」と素直に頭を下げたわけです。

ジャッジミスとなれば審判たちの減俸にもなりかねません。抗議を10分で切り上げてくれたのは、彼らにとつて有り難いことでした。仰木さん、審判の気持ちをつかみました。

長引かせれば選手の体も冷え切ってしまいます。監督、グラウンドだけでなく、スタンドも見ていました。ファンの人たちはだいたいがユニフォーム1枚です。風邪をひかすわけにはいきません。「二宮さん、野球にはね、お客さんに迷惑かけてまで貫く正義はないんだよ」。この人はすごい人だなあと思いました。

正論を貫いて組織がぶれたら意味がありません。流れを変える。人の気持ちをつかむ。リーダーに必要なのは人徳力。仰木監督からは大切

なことをたくさん教えていただきました。

日本人メジャーリーガーのパイオニア、野茂英雄の覚悟

1995年、野茂がロサンゼルスドジャースに入団。ある日のこと、

野茂が投げた後に話を聞こうとロッカールームを訪ねました。中で黒人の大男がバットを振り回して暴れているんです。ドミニカ共和国出身のラウル・モンデシーという外野手でした。その日自分が打てなかった悔しさなのか、吠えながら椅子やロッカーを叩きまくっているんです。ほんの5分くらいのことだったのですが、僕には30分くらいに思えました。

野茂とモンデシーのロッカーは隣だったのですが、その間彼が何をしていたかという、暴れている大男の傍らで静かにファンレター読んでました(笑)。バットの破片なんかか飛んできているんですよ。後でその理由を尋ねると、「二宮さん、男というものはね、人生で一度だけ逃げたいいけない時があるんです」とひと言。しびれましたね。

これには伏線があつたんです。当時のドジャースはいろいろな国の選

手が集まっている球団でした。試合を観ていると、どうもヘンなんですよ。野茂が投げると内野手がちゃんと守らない。手を抜いているとは言いませんが、やる気がないというか、他のピッチャーの時とは明らかに違いました。自分はよそ者なんだと彼も薄々感じていたのだと思います。

ここで逃げたら舐められる。ここは勝負に出よう。あの時、そう思っただけでしょう。翌日、モンデシーが謝りにきたそうです。彼の手下みたいな選手たちも一緒でした。野茂は人生の勝負に勝ったんです。

日本では年俸2億円のピッチャーが、ドジャースとは年俸960万円のマイナー契約だったんです。退路を断った形の挑戦でした。覚悟が違います。ドジャースのピーター・オマリイ会長は、「野茂こそ本当のサムライだ。我々はこのいう選手が欲しかったんだ」と高く評しました。

あの時、逃げていたら、諦めていたら、輝かしいメジャーでの栄光はありませんでした。

稲盛和夫さんの著書に、「仕事の基本は、楽観的に構想して、悲観的に計画をして、楽観的に実行すること」という言葉があります。夢を追って

大海原に出るときは楽観的に。しかし、やると決めたら慎重に準備をし、自信をもって実行する。これが勝者と敗者を分けるメカニズムではないかと思っています。

シドニーの後、高橋尚子選手にはケガに苦しんだ時期がありました。2005年の東京女子国際マラソンで復活を遂げた時、ある選手が「Qちゃんは強い星の下に生まれた人だ。やっぱり何か持ってる」と言うと、「24時間は誰にでも与えられた平等な時間でしょ」と憤慨した様子で応えたそうです。皆、私が強い星の下に生まれたとか言うけれど、あなたたち私の練習見たことあるの？与えられた時間は平等でも、私が結果を出しているのは誰よりも努力しているからよ。おそらくそう言いたかったのでしょう。

イチローのことも「天賦の資質がある」と言う人がいますが、それは違います。彼も「準備の人」なんです。何といつてもすごいのはケガをしないうこと。守っている時もボーっと立っていることはまずありません。いつもストレッッチをしたり、何があってもルーティーンを変えません。このルーティーンを持っている人は強いんですね。迷ったとき、自分に帰る

ことができるからです。

野茂のトルネード投法、イチローの振り子打法。「この技術だけは負けない」というものを持っている人はやはり強い。ある意味成功者の共通点ではないかと思います。同様に、この技術、この商品、このサービスはうちだけという会社はどこにも負けません。最初は上手いかわくてもいいんです。スキルはウィルを育てません。志があるからこそ技術は育つ。日本一、世界一になるという「志」こそがいちばん大切だと思います。

長く現場を見てきましたが、世界のトップに立つ人は勝ち負けを運や偶然のせいにしません。準備なくして勝利なし。コツコツとした準備の延長線上にしか勝利や成功はないのではないのでしょうか。

二宮清純氏プロフィール

1960年、愛媛県生まれ。スポーツ紙や流通紙の記者を経てフリーのジャーナリストとして独立。オリンピック、サッカーW杯、メジャーリーグなど国内外で幅広い取材活動を展開。1999年にスポーツ情報発信する株式会社スポーツコミュニケーションズを設立。テレビのスポーツニュースや報道番組のコメンテーターとしても活躍中。主な著書に「スポーツ名勝負物語」「勝者の思考法」「最強の広島カープ論」「広島カープ最強のベストナイン」など。